



ワクワク保養ツアー in 邑久光明園

願いから
動きへ



福島の子どもたちと一緒に過ごす夏休み in 菊池恵楓園 あそぼい！九州



福島キッズ！湯ったり、ゆら~り in 下呂 & 駿河(プロジェクト YYG+S)

- 「ただいま!」、「お帰りなさい!」。
- そんな言葉で第2回目の保養が始まりました。原発事故で故郷やこれまでの生活を失った方々と、隔離政策で故郷から切り離された方々が、一緒に過ごし、語り合った夏の日々。●忘却や風化の波が押し寄せる世情の中で、一人ひとりの言葉に耳を澄まし、語り合い、世代へと継いでいくことの大切さを教わりました。

解放運動推進本部委員・山内小夜子

人間を
忘れない

36
2013.10.1

ネットワークニュース「願いから動きへ」は真宗大谷派のハンセン病問題への取り組みを紹介する広報誌です。

私たちにできること

ハンセン病回復者支援センターの取り組み④

ハンセン病問題は、「らい予防法」が廃止されて17年が過ぎた今も、未解決の問題が山積しています。隔離からの解放が本当に実感される日に向けてこれからどのような取り組みが必要なのか、大阪にあるハンセン病回復者支援センターの加藤めぐみさんから、センターの活動をお聞きし、今私たちにできることは何かを考えていきたいと思います。

第4回 ハンセン病回復者の家族や親族が抱える課題

「もつと早く、夫がハンセン病だつたことを打ち明けてくれていたら、人生を一緒に楽しめたのに」と、奥さんは涙ながらに語られました。家族は癌末期だと知らされた後にハンセン病療養所にいたことや、指が曲がらないのはハンセン病後遺症であることを告げられたそうです。療養所を退所した後、大阪で人一倍努力して、会社での地位を築いてきたことや妻に打ち明けるときに離婚を覚悟したこと、妻が受け入れてくれたことを田舎の母親がとても喜んでくれたことなどを話してくださいました。子どもさんに「お父さんがハンセン病だったことを聞いた時、どう思われましたか」と質問すると、「父親に別のルーツがあつたことがショックでした。田舎の叔父たちと一緒にあの家で育つたと思つていたのに、子どもの頃に遠く離れたから」。厳格な父が、ハンセン病になつて

亡くなる五ヵ月前でした」と答えてくださいました。夫と一緒にハンセン病まごいの旅」が、一番の思い出だと奥さんは語られました。癌末期とわかつた時、ご自身の人生を自分の口から妻や子に語つておきたいと思い、手記にまとめ、気持ちを整理されたといいます。

H県で暮らす退所者同士のご夫婦は、子どもたちにはハンセン病歴を話さないでおこうと思つています。どちらかが先に亡くなり、残された方も金銭管理ができなくなれば、「退所者給与金」（国賠訴訟で国が敗訴してから、二〇〇二年度から始まつた）をもらつていることがわかるだろうから、その時に話せばいいとおっしゃいます。

ハンセン病回復者の家族や親族といつても、そのおかれている立場はさまざまです。親がハンセン病に罹り、療養所に強制隔離されたために子ど

歴史を泣きながら語つてくれました。

亡くなる五ヵ月前でした」と答えてくださいました。夫と一緒にハンセン病もいます。家族がハンセン病だつたために、恋人と別れさせられた人、打ち明けて結婚はできたけど、生まれてきました。子どもたちには隠している人々、実際にさまざまです。勇気を持って言えば道は開けると簡単にはいえない問題が潜んでいます。ただ、言えるのは「差別をする側の問題だ」ということです。ハンセン病問題の啓発がもつとされなければ、差別する側の人間はかりません。さらにハンセン病回復者と家族や親族は、ハンセン病歴は隠すできません。私たちにできることは、できません。私たちにできることは、ハンセン病問題を知り、その解決に向けて行動することだと強く感じます。

（続く）

社会福祉法人恩賜財団済生会支部大
阪府済生会・ハンセン病回復者支援セ
ンター

コーディネーター 加藤 めぐみ

世のいのりにこころいれて

(親鸞聖人の言葉「御消息集」真宗聖典 568 頁)

世に満ちている「人間でありたい」「本当に生きたい」という人々のいのりを、ちゃんと聞きながら…

韓国小鹿島(ソロクト)更生病院訪問記

韓国小鹿島(ソロクト)更生病院を訪問したのは、今年六月中旬のことでした。今回で五回目。訪問の目的は十月に開催される「第九回真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会」に是非ともソロクトから回復の方をお招きしたいと願い、自治会を訪問しました。

ソロクトは朝鮮半島の南の端にある島で、以前はフェリーでしか行けなかつたが、現在は橋が架かり車で行くことができるようになりました。愁嘆場という親子が道の両側に分けられ別れを惜しんだ美しい松林の海岸に出ます。とても穏やかで静かで緑豊かな美しい島です。それ違うのは多くのボランティアです。

私が日本の植民地時代に日本と同じような隔離施設としてのハンセン病療養所が韓国や台湾に作られたことを知ったのは、ハンセン病違憲国賠訴訟判決後の検証会議でのことでした。その後、日本の回復者と同じように「ハンセン病補償法」による補償請求を求めた訴訟の裁判の傍聴に同行し、二〇〇五年十月二十五日の「台灣樂生院・韓國小鹿島ハンセン病補償金不支給処分取消訴訟判決」に立ち会いました。ソロクト訴訟原告は敗訴、台灣樂生院訴訟原告は勝訴と明暗がつきました。その場には日本に十三ある国立ハンセン病療養所を訪問し交流を続

けている「真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会」(「ハンセン懇」)のメンバーがたくさんいました。その場で、日本だけでなく台湾や韓国の療養所を訪問し、私たちの国が何をしてきたのか、そしてそのことをきちんと謝ることから始まらない。そして、過ちを一度と繰り返さないために交流をしていきたいと有志を募り、二〇〇五年に台灣樂生院を訪問、翌二〇〇六年に始めてソロクト更生病園を訪問しました。

現在ソロクトに限らず回復者は高齢化し加速度的に減少しています。ご自分が最後の一人になることを恐れて早く死にたいという声も聞きます。隔離という国策によって人権を奪われ、ふるさとを奪はずかです。今、私たちにできることは過酷な時代を生き抜いた歴史の証人たちの声を聞き取り、聞いた者の責任として次の世代に繋げていくこと、そして、最後の一人まで支えていく覚悟を表明し関わり続けることが私たちにできるわずかな行動ではないかと思ひます。



交流会で韓国語の歌を披露

私は日本でいくつかの療養所を訪問していましたが、更正園での過酷な労働と手当ての遅れのため両手足指のない人の多さ、監禁室、解剖室、そして断種台(模

「ハンセン懇」有志ソロクト訪問団事務

久米 悠子

ご支援ありがとうございました！

第2回 福島の親子たちにハンセン病療養所で保養してもらうプロジェクト報告

昨年に続き、これまでハンセン病問題に取り組んできた仲間が中心となり、療養所自治会、園の関係者と一緒に福島の親子たちの保養事業を行いました。

ワクワク保養ツアー in 邑久光明園

7月24日～30日

●昨年に続き、今年も元気いっぱいの子どもたちがやってきました。被災者十六人の皆さん、七月二十四日～三十日の日程で光明園入所者との交流を深めました。●今年五月、ワクワク保養ツアー実行委員会の方から今年もワクワク保養ツアーを実施したいとのお話があり、施設側、自治会との協議を重ね、実現の運びとなったのです。●実行委員会の方々は、宿泊所となる楓会館を二度にわたり清掃、物品備品の確認等、万全を期した準備で迎えていただきました。●初日夕方から開催されるウエルカムパーティーは、一年経った子どもたちがどのように成長しているのか楽しみと期待でいっぱいでした。●子どもたちのまとめ役、赤坂きららちゃんは中学生になりすっかりお姉さんになっていた、弟のひゅうま君も身長も伸び大きくなっていました。●佐藤ファミリーの眞実ちゃんは高校三年生になるので少し大人びて、弟の大輔君、亜美ちゃん。加藤ファミリーの綾菜ちゃん、瀧澤ファミリーの優矢君、今野ファミリーの栄里ちゃん、みんなみんな元気に大きく、素直な優しい子に成長していく中で、大変うれしかったです。今年新しく参加いただいた茂木ファミリーも来年もまたお会いできたらいいなと思います。●今回、お母さん方との懇談の時間が持たれ、今なお大変なご苦労があることをお聞きし、胸が押しつぶされそうでした。お父さん一人、福島の被災地で頑張って働いている事、野菜や魚が汚染されているという不安、子どもを外で遊ばせてやれない悔しさ、辛く苦しいことばかりです。皆さま方が一日も早く家族一緒に暮らせ、安全な環境が復元される事を願って止みません。●来年もまた、暑い夏休みにワクワク保養ツアーでお会いしましょう。お待ちしております。元気でお過ごしください。

屋 猛司（邑久光明園入所者自治会 会長）



●この度は子供たちに素敵な夏休みをプレゼントしていただきありがとうございました。瀬戸内海を一望できる素敵なかまわっている姿を日々にみることができます。母親として本当にうれしかったです。また他の保養と異なりハンセン病回復者の方々とふれあい、様々な話をする機会があり、勇気と希望をいただくことができました。正直、この状況がいつまで続くのかと考えると、気持ちが重たくなりますが、離れた岡山でも心配してくださる方がいることを心強く思い、二人が大きくなった時に、保養で岡山を訪れ色々な体験ができたことを伝え、感謝の気持ちを忘れてはいけないと話していきたいと思います。

茂木 千恵（福島市在住）



●ワクワクツアーに参加したこと●わたしは、二回目のワクワクツアーに参加しました。おかやまのおじいちゃんおばあちゃんは、ハンセン病にかかるととてもつらかったのに今は元気でやさしくしてくれてとてもうれしかったです。●おか山で海にいってうきわにういたり深いところまでいきました。くらげや魚もいました。お友達といっしょに思い切り泳ぎました。●神戸大学のお兄さんお姉さんに遊んでもらいました。自己紹介のゲームがおもしろかったです。●スタッフのみなさんありがとうございました。おじいちゃんおばあちゃんいつまでも元気で長生きしてください。

今野 栄里（福島市在住 小学3年生）



●この保養ツアーで子どもたちと共に遊び、参加者の方々だけでなく私自身の保養になったように思います。心の中でみんなの声が響いています。だから、いつまでも福島の方々の声を聞き続けたいです。また会おうねー。

浦西 真人（京都市スタッフ）



●熊本・菊池惠楓園で過ごした夏休み・・・●今回も去年に引き続き、私と三人の息子で参加させていただきました。夏の終わり、ひとまわり大きくなった体は、熊本での自然体験を通して、大いに浄化されたのだと感じます。●今年は五組の参加家族が、入所者さんのお宅へお招きいただきました。やんちゃ盛りの我が家は、訪問は辞退したのですが、交流会に飯田さんがいらっしゃった際には、お茶を飲みながらお話を聞く事ができました。●ご自身の人生におけるグチは一言もおっしゃらず、これからのお子様たちがまだ健やかに育つ様にと、優しく語ってくださいました。●元患者の皆さんに国とのつながりは、今の福島の子どもたちにも起こりうること、決して無関係ではありません。また幼い子どもたちですが、惠楓園での交流を「太い繋り」に。●福島の子どもたちの心の財産となって欲しいです。●保養実行委員をはじめ、日々関わるボランティアの皆さんも、どの様に感謝を伝えるべきか、言葉が見つかりません。「よかよか！」と大きな器で、それにどっぷり浸っていました。特に長男は、弟たちと一緒に「お兄ちゃんだから」という理由で何かとがまんを強いられます。そんな彼にとって、優しく楽しく、そして何より熱く関わってくださるボランティアさんたちは、まさに「理想のお兄ちゃん」なのだと思います。保養に参加して得られる、子どもなりの友情が、福島でがんばる力となっているのです。与えてくれた想い、「どんな時も俺たちがついてるぜ！！」「ともにいきる」を胸に。いつか皆さんの様に、困っている人へ手を差しのべられる大人になってくれたら幸いです。●今年も帰れる場所を作っていました。本当にありがとうございました。●また必ず、元気に笑って！

斎藤 真希乃（参加者）



●昨年よりこの保養に関わり、参加したご家族・恵楓園の方々・スタッフの沢山の笑顔、そして涙に触れることができました。今年聞いた「お帰り！ただいま！」の声、ご縁をこれからも大事にしていきたいと思います。

草野 悅子（スタッフ）

●保養に来られたご家族と一緒に、入所者の方のお宅を訪問させていただきました。みなさん心から嬉しそうに、二コニコで迎えていただきました。子どもの存在力のすごさ！双方いろいろなお話を聞かせていただきました。

上田 文（スタッフ）



●これからも楽しんでもらえたらいいね。

〇さん（入所者）

●自分たちも苦しんできた。子どもや孫のような気がする。福島の人たちも苦しんでいる。再会を楽しみにしている。

Tさん（入所者）

●お迎えした子どもたちは、純粋で目がキラキラしている。保護者の「自然と食べ物に気をつかわなくていい」の言葉に、子どもたちの成長が一番気になる。力強い東北の人になって欲しい。これからも見届けていきたいです。

Iさん（入所者）



●去年は知ることの大切さを教えていただいた。そこにはまだ少し身構えてお話しする自分がいた。でも今年は気負わずにしゃべりできる自分がいた。初対面より二回目、三回目…誰でもそう、会うたびに分かり合える、好きになる。みんな同じことですよね。みなさんにお会えたことに感謝。田舎のおじいちゃんに会いに行くように、また帰りたい。そして子どもたちは自然に差別や偏見のない社会を生きて欲しい。

鈴木 麻記子・希琉（参加者）

●「おかえりなさい」その温かいことばに胸がいっぱいになりました。●たくさんの優しく、懐かしい笑顔、そしてきれいで雄大な富士山に迎えられ、ここに帰ってくることができたことが本当にうれしいと思いました。国策に苦しめられたみなさんが、こんなにも優しく私たちに寄り添ってくださり感謝の気持ちでいっぱいです。私もみなさんのように優しい人になりたいです。

渡邊 美幸・みろく・天（参加者）

●昨年に続き、今年も駿河療養所にお世話になりました。昨年よりも、皆様方との交流が深くなつたことが、とても嬉しかったです。福島で生活する私達に「おかえりなさい」と声をかけていただきありがとうございました。ハンセン病と福島。何も知ろうとしなければ、知らないままの問題だと思います。私は、皆様方と出逢って、やつと知ることができました。ありがとうございました。

遠藤 文美代・美空（参加者）

●初めて療養所に行った時は緊張していて、回復者の人たちを見て少しおかしいなと思いました。でも、今年は小鹿さんの話を聞いて、だからそんなんだという理由がよく分かりました。僕は、そんな人たちを応援し続けたいと思いました。

佐藤 奏成（参加者）

●福島キッズのたくましさに元気をいただきました。将来彼らが大人になって駿河での事をどのように思い出すのかな？ お母さん方の子どもに対する想いに感動しました。

小鹿 美佐雄（駿河会会長）

●昨年に続き、未だ放射線の影響下にある福島から七家族をお迎えした。一年前、母親から片時も離れなかった子も今は逞しい腕白坊主に成長。三泊四日だが、緑の木々の中で遊ぶ子達、ご両親方の輝く眼と笑顔にその苦労が垣間見られ、目が潤む。

青山 南圭（国立駿河療養所 所長）

●昨年の六家族から一家族増えた二十名にお会いし、皆の元気な顔を見てホッとした。その反面、まだまだ二本松の山間部では除染が進んでいないことを伺い、虫取りもできない話を聞いてショックでした。来年も大きくなった子供たちに会いたいです。また、駿河を訪ねてきてください。

小林 昌美（国立駿河療養所 福祉室長）

●今年の保養、駿河療養所での交流会は、参加者の「ただいまー」、入所者・職員の「おかえりー」で始まった。子ども達が大人になっても、この場所が懐かしく心和む出会いの場として存在している事を願わざにはいられなかった。雄大な富士山のように。

旭野 康裕（YYG+S 実行委員長）

●初めて参加された父親が療養所で語られた忘れられない言葉●「川遊びの時、息子と夢中で魚を追いかけた。魚を捕りたかった訳じゃない。全力で川遊びしている父親の姿を息子に見せたかった。本当に嬉しくて涙が溢れてきた。保養に参加して良かった」

江馬 雅臣（YYG+S スタッフ）

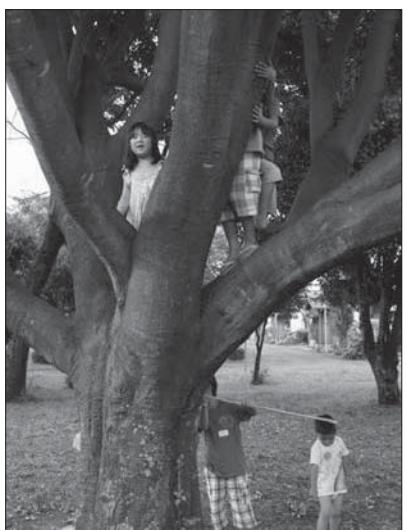
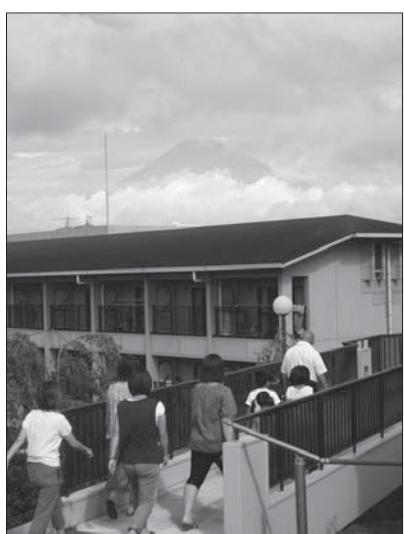
●今年は駿河にも参加でき、園の方に子供たちがカラオケを披露している姿、お帰り～ただいま～と交わし会う挨拶に心がほっこりしました。子供たちが坂の多い園内を裸足で駆け巡る中、へっぴり腰で休憩ばっかのスタッフですが、またよろしくね(*^*)

長井 誉子（YYG+S スタッフ）





療養所でまた会いましょう!!



ハンセン病問題の現状

ハンスト宣言継続中

あとがき

一九九六年にらい予防法が廃止され、二〇〇一年にはハンセン病訴訟が勝訴。そして二〇〇九年にはハンセン病問題基本法が施行されました。

その基本法には、国のハンセン病問題への施策は、隔離政策による被害を可能な限り回復することを旨として行わなければならないとしており、国が入所者に必要な療養を行うこと、国が医師や職員の確保や医療整備に努めることなどが明記されています。ハンセン病問題は、解決に向かつて進んでいくはずでした。

ところが、平均年齢八十二歳のハンセン病療養所の入所者は、ハンガーストライキや座り込みを行うことを決議したのでした。二〇一二年七月のことです。その理由は、国の国家公務員の定数削減計画により、療養所の職員が削減され、入所者の療養生活に深刻な事態が発生しているから、としています。職員の確保や医療の充実とは言えない療養所の実態に、入所者の不安が広がっているのです。

あれから一年が経ちました。ハンスト宣言は終息したのでしょうか。いいえ、いまだ、ハント宣言は継続中なのです。この一年、政局は不安定となり、昨年暮れには政権が自民党へと交代しました。入所者代表は、国会議員への要

請行動などを精力的に進めていたのでした。

去る八月十四日には、入所者代表が田村厚生労働大臣に面談し、二〇一四年度は、前年度と同数の定員を確保した一三年以上に、療養体制を充実させてほしいことを申し入れました。田村厚生相は「皆さんのが不十分だと訴えていることを踏まえ、一四年度はしっかりと対応する」との意向を表明しました。

国には、ハンセン病回復の方々に人間としての尊厳ある生活を確保し、保証する責任があります。そのことが具体的な形で実現されることを、是非私たちも注視し続けていきたいものです。

（「ハンセン懇」広報部会 酒井義一）



真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会 ネットワークニュース

『願いから動きへ』36号
発行日 2013年10月1日
発行人 奥林 瞳
発行 真宗大谷派解放運動推進本部
〒600-8505
京都市下京区烏丸通七条上る
真宗大谷派宗務所
TEL 075・371・9247
FAX 075・371・9224
E-mail kaih@higashihonganji.or.jp

●今夏、私がいる三条教区において、初めて福島の子どもたちのための長期保養を行うことができた。隣県であるのに本当にやつと実現することができたという感がある。●福島原発の事故から二年以上過ぎているにもかかわらず、また様々なメッセージが福島から届いていたはずなのに、なぜ子どもたちの一時保養を行う体制が整わなかつたのだろうか。確かに教区の諸事情もあるだろうが、何より隣りの福島の状況をどこか他人事にしている私たちがいたからではないか。きちんと本気になつて福島の子どもたちのことを考えていなかつたからではないかという反省が頭の中をめぐる。●十月に第九回ハンセン病問題全国交流集会が行われる。私にとつては交流集会に参加するのは二回目である。それほどハンセン病問題に関わってきた時間はまだ浅い。しかしながら、今回どのような出会いがあり、交流ができるのか今から楽しみである。少なくとも福島原発事故の問題と同様に、ハンセン病問題が他人事ではなく、私の課題となるような交流集会になればと思う。

（「ハンセン懇」広報部会 高橋深恵）